

外来における医師の立場、患者の立場

外来診療は、患者さんと医師が最初に出会う場所である。そこでは、限られた時間で数多い患者さんを診察しなければならない医師と、長い時間待って数分の間に病状を話し、悩みを訴え解決しようとする患者さんとが様々なドラマを繰り広げている。多くの場合、患者さんは受け身に立たされる。

「どうしましたか?」「出血したんです!心配で・・・」「診察してみましょう」。しばらく無言の時間があり、

「心配ないと思います。念のため子宮癌の検査をしておきました。1週間後には結果が」「1週間後ですか?」と、まだ不安な気持ちをぬぐいきれないまま立ち去る患者さんの背に「お大事になさってください」と看護婦。ホッとする間もなく、別のドラマが始まる□□。

多くの場合、このように医師から患者さんへの一方的な語りかけのドラマが展開される。患者さんの多くは、自分の病状を悪い方へ悪い方へと思い込み、いろいろな事を相談したいと思って来ても診察室で医師と向かい合うと、限られた時間では相談したい事の1/10も話せないのが現状である。十分に時間をかけて話を聞いてあげなければならないと分かっているにもかかわらず、数の診療を強いられ、検査や薬を出さなければやっていけない現状の医療制度にあっては、ゆっくりと患者さんと語り合うアットホームなドラマは評価されないのである。

だから時にはこんなドラマの展開が□□。

「もう婦人科には来なくていいですよ!」と診察を終えて話す医師。診察を終えた患者さんが記録する医師の机に手を置き、顔を伏せて急に泣き崩れた。「どうしたんですか」「先生はもう来るなど言った。私はどこへ行けばいいんですか」とまた泣き崩れる。事の重大さに驚き、医師は弁解とも言える病状の説明を始める。なかなか納得しない患者さん。血尿があり、内科、泌尿器科で精密検査を受け、異常無いと言われて婦人科に回されてきた患者さんであった。婦人科的にも異常はみられないが、血尿は続いていた。夫に先立たれ、お手伝いさんをしながら独りで暮らす70歳の老女である。「来なくていい」と言われてどうしてよいのか分からなくなったのだという。

ちょっとした言葉。何気なく話したことがドラマを思わぬ方向へと展開させてしまう。限られた時間といっても患者さんの悩みに応えられるのは医師だけである。現状に甘んじてきた医師に、今に“大きなツケ”が回ってくるような気がする。